

2022年6月26日 説教「最も小さい者たちに」

マタイの福音書 25章 31～46節

25章の終末の再臨に関する最後の部分から学んでいきます。

1. 御前に集められ (31～33節)

- ① 栄光を帯びて (31) 「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。」人の子(キリスト)が、栄光を帯びてこられる時には、御使いたちが一緒だということがわかります。そして、再臨の主は栄光の位にお着きになるというのです。座席があるわけではありません。ちょうど裁判官のように、さばきの座にお着きになるということです。
- ② 羊と山羊 (32) 「そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け」その時、すべての民は主の前に、さばきを受けるようにして集められるのです。それは羊飼いが、外見はいささか似ていても、違う種である羊と山羊とを、二つに分けることになるのです。
- ③ 右と左に (33) 「羊を自分の右に、山羊を左に置きます。」羊がよく主に仕える存在として用いられるので、主につながる者として羊が右に置かれるのでしょうか。反対に山羊は左にまとまって置かれるのです。

2. 主を愛し、良い行いをする人々 (34～節)

- ① 御国を継ぐ (34～36) 「そして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べるものを与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』」まずは右側にいる羊に例えられた人々に言われるのです。それは王の祝福の言葉でした。備えられた御国を継げと言われているのです。光栄です。その理由としては、彼らは王である方が①空腹の時に食物を与え、②喉が渴いていた時は水を飲ませてくれ、③旅人であった時には宿を貸し、④裸の時には着物を、⑤病気の時には見舞い、⑥牢にいる時には面会にきてくれたからというのです。
- ② 空腹なのを見て (37～39) 「すると、その正しい人たちは答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』」しか

し、正しいと言われた者たちは、王からおほめのお言葉をいただきましたが、も、身に覚えのないことでした。食べ物、水分、宿泊、看病、着物、見舞いなどをしてあげたと言われても、そのおぼえがないのです。いつそれをして差し上げたのでしょうかと問います。

③これらの兄弟たちに(40)「すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』」すると王様は答えたのです。まことに(アーメン)言いますよ。あなたがたは、私の兄弟たち、とりわけ貧しい人々のために、こうした愛のわざをしたのは、わたしにしてくれたことになるのだよと。

3. 主を忘れて生きる人たち(41~46節)

①永遠の火に(41~43)「それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。おまえたちは、わたしが空腹であったとき、食べ物をくれず、渴いていたときにも飲ませず、わたしが旅人であったときにも着る物をくれず、病気のときや牢にいたときにもたずねてくれなかった』」今度は左にいる者達に言います。つまり、この人たちは山羊に例えられていました。彼らはのろわれた者だということです。わたしから離れて、悪魔たちのために用意された永遠の火に入れ、という厳しいお言葉です。なぜなら、王が空腹であった時も、渴いていた時も、旅人であった時も、病気の時も、牢にいた時も、何もしてくれなかったね、と言われたのです。

②いつしなかったか(44) そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、渴き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』すると、彼らは反論します。いつ、そのようなことがありましたか。あなたが空腹のであり、渴いている時、旅をしている時、病気をしている時、牢にいた時に、お世話をしないなどということがあったでしょうか。

③最も小さい者たちにしなかった人(45~46)「すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、わたしにしなかったのです。』」こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入ります。すると、王は言うということです。おまえたちが、この小さい、誰からも目をとめてもらえない者たちに、何もしなかったのは、王であるわたしにしなかったのと同じなのだ。

《結論》トルストイの民話のなかに、「靴屋のマルチン」という短編があります。知っている方も多いでしょう。町で靴屋をやっているマルチンは、地下から町の人々の靴を見るだけで誰のかがわかるほどでした。家族を失って寂しくして、やるせなかった彼に聖書を読むことを教える人がいました。「すべて重荷を負っている人はわたしのものにきなさい。」という言葉は慰めでした。そんなとき、彼にイエス様が呼びかけられました。「今日、わたしはあなたの所に行くよ」と。彼は楽しみにして待ちました。そのさなかに、家の近くでは老人が寒そうにしています。マルチンは家に入れて、温かいお茶を振舞いました。またしばらくして、赤ちゃんを抱く貧しそうな女性がいます。家に招じ入れて、温かいスープやミルクを飲ませました。また、リンゴを盗んだ少年とそれを追う夫人にも出会い、彼らをとりなします。そうして日が暮れていきますが、イエス様はこられませんが。夜になってイエスさまが来られて、「今日、わたしはあなたの所に行ったのだよ。あの老人も、母子も、少年の夫人もみんなわたしだったのだよ」と。マルチンの心は幸せで満たされました。

クリスマスの時に読まれたり、演ぜられたりするお話です。このお話は、今朝の聖書箇所を基にトルストイが民話風にして作ったものです。

ただ、この聖書箇所が本来意味していることは、靴屋のマルチンにあらわされた慈善的に行いではありません。この聖書箇所は第一義的には、終わりの日のことが語られるなかで、伝えられた話です。ですから、右と左にわけられた羊たちと山羊たちというのは、主なる神に対して、どのように関わって来たかということが問題にされているのです。人間に対して、どのようなわざをなしてきたかというのは、第二番目のことです。ここでは、主を愛し、主に信頼し、イエス・キリストとともに歩んで来た者は、羊と同じ側に加えられます。一方、神に背を向け、自分勝手に生きて来た者は、山羊と同じ側に加えられるのです。ですから、この聖書箇所を読む者たちはまずもって、再臨の主をお迎えできるように、主に立ち返って、キリストと共に歩む決意を新たにする必要があります。日々の小さなことにおいても、主の御言葉によって生きていくことが問題となることが教えられているのです。

慈善的行動は、その上のことです。主を愛し、主に愛され

ていることを知っている者が、隣人に対して愛を注ごうとする。そのなかで、最も大切なことは伝道でしょう。福音をお伝えすることが、人々への最大のプレゼントであるからです。とはいえ、人は上っ面の言葉を信じないということも事実でしょう。隣人に対しての、タイムリーで心のこもった愛のわざをなしていくということは、重要です。それは結果として、その方々がキリストを知っていくことになりましょう。慈善行動はそれ自体が目的となったり、時には自己宣伝をすることにつながることもあるということです。そのためにも、主を礼拝することを第一にし、その上で、主から送り出されるようにして、人々への働きかけへと進ませていただきたいものです。人々への目立たない仕事をこつことつと行っていけたらよいですね。「最も小さい者たちに」とありますが、謙遜な思いのなかに、具体的実践ができたらと